

モリ保険事務所(創業大正7年) 第1話

大正期、水産加工業に沸く気仙沼で創業

大火、空襲、チリ津波 幾多の災害を闘い抜く 東日本大震災

百年続く代理店の秘密はどこにあるのか。一言、「地域密着」顧客のために「を追求してきた結果といえるが、1世紀の間には代理店もさまざまな時代の荒波をかぶり、その中で翻弄(ほんろう)されてきたはずだ。気仙沼に至っては、自然災害や太平洋戦争などの被害も数知れず、また、漁業を含めた地域の基幹産業の衰退もあった。そうした中、大正7年(1918年)気仙沼鹿折(ししおり)に創業したモリ保険事務所は、

百年代理店 かく語りき



鹿折中学校に残されていた 初代森庄治郎氏の写真

地元名士だけに 許された代理店 事業

モリ保険事務所は大正7年(1918年)、森庄治郎氏が創業し、森庄治郎氏が創業し

た。丸に水の文字をしたためた屋号「まるみず」は、良質の水がわく井戸があったことから名付けられた。 当時、気仙沼は国内有数の漁港として発展を遂げていた。特に水産加工業は伝統的食品の「竹輪蒲鉾」をはじめ、さまざま



まな加工品がこの港から日本各地や外国へと送られていった。 罐詰工業もそうした産業の一つで、明治37年(1904年)から38年(1905年)の日露戦争当時は全国一の生産高を挙げた。 大正時代に入ってもその余韻は続いており、明治40年(1907年)から大正10年(1921年)にかけて、生産高は6万8308円から95万304円と飛躍的に拡大している。 当時、まだ鉄道は開通しておらず、交通手



気仙沼全滅とも言われた昭和4年の気仙沼大火 『けせんぬま写真帖』(気仙沼商工会議所)より

段としては汽船がその役割を果たしていたが、馬車や人力車も重要な交通手段の一つだった。 気仙沼に鉄道が開通するのは、昭和4年(1929年)まで待たなければならなかった。 莫り保険事務所は三菱海上火災に代理店登録を行っている。 そのいきさつについては、大正期、罐詰工場を取り引きのあった三菱海上火災から、石油業か保険業を営んではどうかとの依頼があったからだ。 本来は石油業を営む予定だったが、石油業は1社だけでは困難で、数社が出資して設立する必要があった。 当時、地元の企業家たちが

参集して会合を持ったものの、意見がまとまらず、時間的な制約もあって保険業を選択した。 保険業であれば1社だけで事業が行えるというのが理由だ。 初代の森庄治郎氏の人像についてはよく分かっていない。 それは、現社長の森雅志氏が生まれる前に急逝していることによる。 しかし、伝えられるところによれば、口数は少ないものの、常に笑顔を絶やさない、穏やかで懐の広い人物だったという。 保険代理店は、かつて地元の名士にしか許されなかった。 契約者から多額の現金を扱う商売だからだ。 それは、庄



昭和5年ごろの気仙沼鹿折地区 『けせんぬま写真帖』(気仙沼商工会議所)より

気仙沼は過去、幾度となく大きな災害に遭遇してきた。 その中でも、とりわけ昭和4年(1929年)の大火は「気仙沼全滅」とまで報道された歴史に残る甚大な災害だった。 この火災で港を中心とした周辺一帯が焼け

野原となり、903戸が焼け、罹災(りさい)者4923人、損害額700万円の被害を出し、気仙沼経済に大きな打撃を与えた。 気仙沼商工会議所が発行した「けせんぬま写真帖」によると、「大火は二月二十三日午前零時三十分ごろ、町の中央、横町から火の手があがった。 およそ二十分間の風にあおられ魚町一丁目、大堀町へと延焼した。 蒸気ポンプ、腕用ポンプを動員して必死の消防活動にもかかわらず火の手はさらに中山通・新中山通・中通南町一帯を焼き尽くし、魚町全体から神明崎の五十鈴神社まで延焼。 火魔はさらに入沢、太田にまで延びた。 それが午前四時ごろ、もつとも旺盛で、まさに生き地獄の様相であった」とある。 莫り保険事務所では、創業以来の顧客との関係が現在も脈々と続いている。 保険の種別では火災

は、気仙沼大の火の際の素早い保険金支払いに対応が顧客の評判を生み、契約が一気に伸びたからだ。 大正から昭和、さらに平成へと3代にわたる顧客の中には、「昭和4年の気仙沼大火の時に保険金をすくすく受け取ることができて助かった。 その礼を欠かしてはならない」と、代々の言葉を受け継いでいる顧客もある。 顧客が2代3代と代替わりし、代理店も同様に2代3代と続く中で、それぞれの世代ごとに信頼が脈々と受け継がれてきた。 過去のきずなが風化せずに残っていることが、気仙沼で莫り保険事務所が1世紀にわたって継続し得た基盤となっている。

昭和4年の気仙沼大火の後、莫り保険事務所のある気仙沼鹿折地区は地域整備が進んだこともあり、入居者が急増した。 掘り抜き井戸が開発され、地下水利用が自由となったことで水産加工業者も増え始めた。 当時、鹿折には大規模な工場が2軒以上あり、莫り保険事務所の母体である森庄治郎氏の工場も力キのボイル煮を開始するなど、新たなビジネスをスタートさせた。

昭和4年の気仙沼大火の後、莫り保険事務所のある気仙沼鹿折地区は地域整備が進んだこともあり、入居者が急増した。 掘り抜き井戸が開発され、地下水利用が自由となったことで水産加工業者も増え始めた。 当時、鹿折には大規模な工場が2軒以上あり、莫り保険事務所の母体である森庄治郎氏の工場も力キのボイル煮を開始するなど、新たなビジネスをスタートさせた。

終戦まで6日、突如グラマンが頭上に

日本が海外へ進出するに連れ、鹿折の罐詰工場は黄金期を迎え、繁栄の一途をたどるはずだった。 しかし、昭和16年(1941年)12月8日、そうした将来の繁栄の約束は覆された。 日本はこの日、真珠湾を攻撃して太平洋戦争の泥沼に突き進んでいった。 それでも、森庄治郎の生産量は秀でていた。 昭和17年(1942年)の記録によると、森庄治郎の主要製品は、鮪油煮、鮪水煮、鯉味付罐詰などで年に4万箱を生産している。 ほかの多くの罐詰工場の1万箱からすると、約4倍の開きがあった。 戦況が厳しくなるにつれ、莫り保険事務所と罐詰工場も戦争という巨大な渦の中に巻き込まれていった。 太平洋戦争では戦時下の名の下に、多くの造船鉄工所や運送会社などを一つにまとめる企業合同政策を強いられた。 国や県の命令によるものが多かったが、気仙沼では罐詰業界自らが企業合同に向かった。 気仙沼市史に目をやると、「輸出缶詰が停止して業界が不況となったため、昭和十七年、県内業者が合同し、経営の合理化を図ろうとして現物出資によって合併した。 気仙沼には森庄治郎工場を出張所とし、各工場の設備を同工場に統合集結したものであった」とある。 森庄治郎は当時、地域をまとめ、軍需産業への協力を余儀なくされた。 戦況は刻々と日本の不利となる中、8月6日に広島、同9日には長崎に原爆が投下された。 日と同じくして、気仙沼でも大規模な空襲が始まった。 莫り保険事務所のある

た鹿折地区には航空機の燃料となる油を精製する松根油工場のほか、罐詰工場も軍需産業の一つとなっていたことから、標的にされた。 9日と10日の両日、米空母レキシントンから離陸した重戦闘機グラマン数機が気仙沼周辺上空に飛来、爆弾投下と機銃掃射を行った。 米機は、力キ樽を燃料のドラム缶と間違えて攻撃したのではないかと話も残っている。 急降下加速性に優れたグラマンによる超低空からの機銃掃射は住民を震え上がらせた。 その執拗(しつよう)な攻撃の光景は獲物に迫る猛禽(めいけい)のようだったという人や、パイロットの笑う顔さえ見えたと言っている人もいた。 爆撃は鹿折地区周辺を火の海と化し、森庄治郎工場も爆撃で吹き飛ばされた。 当時、消火作業に当たっていた消防班員が爆撃を受けてホースを握ったまま殉職したという。 終戦まで、後6日の出来事だった。 戦争は多くの人命を奪い、産業を破壊し、その後の希望まで打ち砕いた。

【参考文献】『けせんぬま写真帖』(気仙沼商工会議所)、『気仙沼町誌』(気仙沼町)、『気仙沼市史』(気仙沼市)、『雲はかえらず』(戦争体験を記録する会)、『鹿折の歴史』(畠山泰二遺稿集)



米戦闘爆撃機グラマン同型機 『けせんぬま写真帖』(気仙沼商工会議所)より

野原となり、903戸が焼け、罹災(りさい)者4923人、損害額700万円の被害を出し、気仙沼経済に大きな打撃を与えた。 気仙沼商工会議所が発行した「けせんぬま写真帖」によると、「大火は二月二十三日午前零時三十分ごろ、町の中央、横町から火の手があがった。 およそ二十分間の風にあおられ魚町一丁目、大堀町へと延焼した。 蒸気ポンプ、腕用ポンプを動員して必死の消防活動にもかかわらず火の手はさらに中山通・新中山通・中通南町一帯を焼き尽くし、魚町全体から神明崎の五十鈴神社まで延焼。 火魔はさらに入沢、太田にまで延びた。 それが午前四時ごろ、もつとも旺盛で、まさに生き地獄の様相であった」とある。 莫り保険事務所では、創業以来の顧客との関係が現在も脈々と続いている。 保険の種別では火災